

# 自文化回帰の異文化体験

—映画における中国系アメリカ人女優ジョアン・チェン—

呉 小莉

## 《Summary》

### Returning Back to Her Home Culture on Screen

#### — Chinese-American Joan Chen's Cross-Cultural Experiences

Wu Xiaoli\*

Well-known Chinese actress Chen Chong (Joan Chen) made her international debut in 1987, in Bernardo Bertolucci's film *The Last Emperor*, which won many Academic Awards that year. From then on, Chen portrayed many kinds of characters with varying cultural backgrounds in Hollywood movies. In 1994, she played in Stanley Kwan's *Red Rose, White Rose* which is the turn won her a best actress award at the Golden Horse awards, the Chinese-language Oscars. In 1998, Chen returned home to direct her film, *Xiu Xiu: The Sentdown Girl*, which received many citations at international film festivals and won seven Golden Horse awards, including best film, screenplay as well as director.

In this paper, I will discuss some cultural issues from a cross-cultural perspective by analyzing Joan's movies—one of her Chinese movies *Little Flower*, and five of her English movies in which she experienced varying cultures herself by playing roles of different nationalities with varying cultural backgrounds. I will also examine her Chinese film *Red Rose, White Rose*, through which Joan met her own culture. Finally, I will introduce the first movie she directed *Xiu Xiu: The Sentdown Girl*. By directing this movie, Joan Chen completed her journey of going back to her own culture.

---

\* 城西國際大學留學生別科專任講師·研究員

## 1. はじめに

1970年代の終わり頃から、30数年間「閉鎖」されていた中国では、「改革開放」という政策を実施し、歴史的な変化をとげた。これに伴って、一部分の中国人が自分の国を飛び出し、外国という未知の世界に踏み込むことが可能となった。彼らは、つまり、一つの文化・社会の中で一生涯生活するのではなく、人生の途中で異文化に移行する機会を与えられたのである。この当時は、国を出る形式といえば、今の海外観光や海外勤務と違って、国費あるいは私費での海外留学が主流だった。彼らは自国の文化環境を離れ、異質文化と接触し、これにより特別な体験を持つことが出来るようになった。一方、いままでとは全く違う「未知」である異文化の中に生きていくことにより、この異質文化に直面し、これを味わい、吸収し、習得したものが沢山あると確信している。もう一方では、外部から「既知」である自国文化を客観的に再発見することも出来た<sup>(1)</sup>。つまり、外国という環境の中で、自文化への省察、自文化との比較、そして自文化を再認識し、見直すことが無意識のうち出来るようになってきたのである。

本稿は渡米してハリウッドという舞台で活躍している中国系アメリカ人女優・女性映画監督ジョアン・チェンという考察対象を取り上げ、彼女が出演・監督した映画作品を通し、異文化間コミュニケーションの視点から、異文化体験の意味と価値を検討してみたい。そして、それによって、自文化との関連性への理解と認識に関する私なりの見解を描いてみようと思う。ここで選択しているジョアン・チェンの作品は彼女にとって自文化である中国で主演した『戦場の花』、異文化圏に移行したのち英語で出演した代表作5部、また再び中国語で主演した『赤い薔薇・白い薔薇』、加え、初監督作品『シュウシュウの季節』である。

## 2. 「自文化」を踏み出す前に—『戦場の花』に主演

まず、ジョアン・チェンが異国に踏み出す前に自国文化の環境の中で主演した代表作を取り上げてみたい。

「自文化」あるいは「自国文化」とは、自分の所属している、自分自身が生まれ育った文化のことと理解されている<sup>(2)</sup>。これは異質文化へ移行する前に、だれもが体験の出来る自分にとって「既知」という場所でもある。

本稿で取り扱った主人公ジョアン・チェンの本名は陣沖で、1961年中国の上海に生まれた。彼女は77年に、謝晋（シェ・チン）監督の『青春』で映画デビューした。その後、上海外国語学院に入学し、英語を専攻した。在学中の79年に、女優出身の張錚（チャン・チョン）監督作品『戦場の花』に主演した<sup>(3)</sup>。

最初に紹介する『戦場の花』（原題：小花）という作品は、戦争映画であり、また兄妹愛の物語でもある。

革命前、生活苦のために妹を売られて、別々に育った兄と妹がいる。兄も妹も、それぞれ別の道をたどって人民解放軍の兵士になる。その後、妹を売られてしまった後の兄の家に、反乱に失敗した紅軍の指導者の子である赤ん坊が預けられ、売られていった妹と同じく小花と名づけられる。ジョアン・チェンはこの小花の役を演じた。そこで、やがて成長した兄・趙永生も人民解放軍に入り、三人は別れ別れになる。兄を探し求める小花（ジョアン・チェン）のところに解放軍がやって来る。小花は軍の女医と知り合って衛生隊に参加する。一方、趙の実妹であるもう一人の小花は成長して解放軍の遊撃隊の女性英雄になっていた。こうして戦乱の中で別れ別れになっていた三人兄妹が、やがてめぐり会うときがくる。国内戦であるので戦争と日常生活が入りまじり、軍隊生活の中にホーム・ドラマ的な要素がまざっている<sup>(4)</sup>。

ジョアンは中国のその時代に生きていた典型的な革命意識のある中国人女性を演じた。これによって、彼女は自文化環境の母国での体験が出来るようになったとも言える。なお、この作品でジョアンは19才の若さで、中国の映画賞「百花賞」で最優秀主演女優賞を獲得し、いわゆる有名なムービー・スターになっていった<sup>(5)</sup>。『戦場の花』はジョアン・チェンが異国に踏み出す前に自国文化の環境の中で演出した代表作と認められる。

### 3. 「異文化」との接触、体験の開始—英語による5部の映画作品への出演

ジョアン・チェンは『戦場の花』に主演した翌81年にアメリカへ渡り、ニューヨーク州立大学とカリフォルニア州立大学 Northridge 校で演技と映画製作について勉強した。それから、1984年～1993年の間に彼女は英語という外国語を使い、8部程度の映画に出演している<sup>(6)</sup>。ジョアンは外国という「異質文化」に踏み込んで、さまざまな文化背景を持つ役に扮することを経て多数の文化と接触し、これを体験することができたといえる。

ここで、本稿で使った「異文化」と関連のある「異文化接触」、「異文化体験」と「異文化コミュニケーション」などの概念を確認しておくことが必要であると思う。

「異文化」は、文字通り、異なる文化のことであり、一般的には、自分の文化以外の文化、すなわち、外国文化を指すことになる<sup>(7)</sup>。つまり、自分が育ってきた自国文化あるいは自文化と反対の意味であること。

「異文化接触」という概念は、渡辺文夫、ボクナー (Bochner, S.)、齊藤耕二などの研究者は各自の定義を与えていたが、ここで、鈴木一代がまとめた概念を取り上げたい。鈴木によれば、「異文化接触」とは、異なる文化の背景をもった個人あるいは集団の間で展開される相互作用のことをいう。ここでは、異文化接触を、ある文化・社会のなかで、ある程度の社会化あるいは文化化をしてきた人が、他の文化のなかで社会化・文化化されてきた個人や集団ともつ相互作用としてとらえている<sup>(8)</sup>。本稿では、個人レベルの「異文化接触」という前提条件をつけている。

「異文化体験」という用語は、1980年に、箕浦康子によって、帰国子女に関連して初めて用いられた<sup>(9)</sup>。その際、異文化体験は、「経験の主体としての個人に焦点がおかれており、それまでに内在化している文化を離れて、他の文化が支配的である文化に移行して、そこでの文化を担っている人びとと相互作用をもつこと」を指していた。すなわち、異文化間接触という現象を、主体としてそこに参加している個人の側から見た場合には、異文化体験ということばで表されるといえるのである<sup>(10)</sup>。

また、「異文化コミュニケーション」は、「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程である」と石井敏は定義している<sup>(11)</sup>。異文化コミュニケーションのプロセスを完成するために、言語という手段は不可欠となる。これも異文化に進入した時、だれでも直面することである。以上、「異文化」と関連のある概念を確認してみた。

次に、ジョアン・チェンが英語で出演した、筆者が日本で手に入れた5部の代表作を取り上げ、彼女がどのように異文化を体験したかについて検討してみたい。

第一作目は、1987年に、ベルナルド・ベルトルッチが監督し、多国籍のスタッフが作り上げた『ラスト・エンペラー』である<sup>(12)</sup>。この作品の中では、ジョアンは歴史のうねりに翻弄される清代最後の皇帝溥儀の妻役を熟演した。この時、彼女は初めて Joan Chen という英語の芸名を使った。

この映画はロケ地を中国に置いているが、ジョアンは中国語ではなく、英語という外国語を使って出演した。作品の中では、言葉だけではなく、彼女の表情や仕草なども外国風になっていることを感じさせた。たとえば、紫禁城内、皇帝溥儀と会った時のアイコンタ

クトはとても中国人とは思えない表情である。

『ラスト・エンペラー』はその年のアカデミー賞で9部門を受賞した。ジョアンは、この作品で一躍アジアを代表する国際的女優の地位を確立し、以降は世界を股にかけて、活躍を続けていくのである<sup>(13)</sup>。

次に、ジョアンは1991年、スティーブン・ウォレス監督の『抱きしめたいから』<sup>(14)</sup>の中で、ベトナム出身のオーストラリア駐マレーシア大使夫人という役を演じた。この映画では、ウミガメが産卵のためにやってくる美しい浜辺タートル・ビーチで起きる、ベトナム難民とそれを拒む現地のマレーシア人との間の流血の悲劇が扱われている。彼女は、難民としてやってきた自分の子どもを守るために、海に飛び込み、自殺したのである。自分の死という代償で、子どもの身替わりになるベトナム人役を演じることにより、異文化を体験することができたことがわかる。

第三作では、1993年、オリバー・ストーン監督のベトナム戦争についての三部作の一つである『天と地』<sup>(15)</sup>で、徹底した老け役のベトナム人女性を演じた。主人公レ・リーの母親として、戦乱の時代に必死で子どもを守り、一生懸命生きていく古風な女性の姿を熟演した。演技派としての実力をあますことなく発揮した作品であり、役者としての評価に加えて、彼女が異質文化を深く体験しているという印象を受けた。

第四作は、1994年、スティーブン・セガール監督・主演作のアクション・ムービー『沈黙の要塞』<sup>(16)</sup>で、アメリカン・インディアン役で出演した。彼女は、アラスカで石油採掘権を守るために悪の限りを尽くした石油会社社長との戦いに加わる役である。作品自体、優秀とはあまり思えなかったが、ジョアンは、アメリカで生まれ育った少数民族の役を通して、もう一種の文化と接触したのであろう。

もう一本の作品は、1995年、J. F. ロートン監督の『ハンテッド』<sup>(17)</sup>で、これは日本をロケ地に置いた作品である。この映画でジョアンは、若い日本人キリナ役を演じ、死を前向きに考える勇気と冷静な態度に美しさを感じさせた。同じアジア人だが、文化の違う魅力的な日本人女性役を演じることによって、日本文化を味わうことができたのである。

以上、ジョアン・チェンは、言語や文化の壁を乗り越え、様々な文化背景を持つ役を演じることによって、異文化を体験し、これを会得していったといえよう。

#### 4. 自文化との再会—『赤い薔薇・白い薔薇』への主演

異文化と接触すること、あるいは異質文化を体験することは、単純に異文化とぶつかる

自文化回帰の異文化体験—映画における中国系アメリカ人女優ジョアン・チェン—  
ことではなく、自文化との出会いもできることだと考えられる。

異文化に移行した瞬間から、自文化との出会いも始まる。つまり、異質のものに触れ、  
先ず自文化と比較し、「違う」という結論が出てきたら、これは「異」を感じることができ  
たことになる。これにより、自文化への省察、自己分析の機会が与えられる<sup>(18)</sup>。

異なる文化を知ることによって、自文化と比較する視点を得、異文化から獲得したさま  
ざまな新しいアイデアや価値観などを、ほかの文化と比較することができる複眼的な判断  
ができる幅をもつことができる。まさに、異文化は自文化を知る鏡なのである<sup>(19)</sup>。

ジョアンはこの異文化の鏡を手に握って、自文化と再会する作品に挑戦していった。

1994年、ジョアン・チェンはスタンリー・クワン監督の『赤い薔薇・白い薔薇』<sup>(20)</sup>に主  
演した。この作品への主演によって、ジョアンは自文化と再会することが実現になったと  
考えられる。

『赤い薔薇・白い薔薇』は、中国人女性作家張愛玲（チャン・アイリン）が1944年に書いた  
同名の原作に基づいて作られた。

映画化されたこの物語は、繁栄を極めた30年代の上海を舞台として、留学先のイギリス  
から上海に戻ってきた一人の青年チェンパオと、二人の中国人女性の愛と性を描いたラブ・  
ロマンスである。彼は友人に借りていた家で、魅力的な友人の妻チャオルイと出会った。

ジョアン・チェンが演じたこのチャオルイは、シンガポール出身の華僑であり、留学先  
のロンドンでは、「社交界の花」として有名であった。そこで知り合ったシーホンと結婚し、  
上海に移住してきた。その後、エリート青年のチェンパオと出会う。チェンパオは、仕事  
で成功を収め、母親や妹のために世俗的な地位と栄誉を獲得しつつある時期であった。チェ  
ンパオは、美人で知的なチャオルイに引かれていく。しかし、自制心の強い彼は、すでに  
結婚している彼女に対する自らの欲望を抑えていた。しかしながら、少女のような可愛ら  
しさと大人の女性の美しさを合わせ持った、チャオルイの独特な女性的魅力はチェンパオ  
を完全に魅了した。

チャオルイの方もいつしか真剣に彼だけを愛し始めるようになった。そして、彼女は出  
張先の夫に離婚の意思を告げた。これを聞いたチェンパオは激しく動揺する。友人の妻を  
自分のものにしてしまうことは彼のプライドがどうしても許さなかったのであろう。また、  
自分の将来も考え、彼はチャオルイの元を去って行った。

その後、チェンパオが結婚相手に選んだのは、赤い薔薇のように肉感的で奔放なチャオ  
ルイとは対照的な、少女っぽく、生真面目で従順な白い薔薇イエンリーだった。イエンリー

は物静かで、いつもチェンパオの言いなりになっていった。彼はそんな彼女に対し、物足りなさを覚え、あからさまに見下す態度で接する。給料も渡さず、欲望にまかせて次々と娼婦を買ようになっていき、生活は乱れた。一方、チャオルイはチェンパオと別れた後、心の傷を癒しながら、自分の生きがいを探して行く。

すさんだ気持ちで街をふらついていたチェンパオは、思いがけず、昔の恋人だったチャオルイと再会した。彼女は前の夫と離婚した後、再婚し、すでに落ち着いた一児の母親になっていった。彼にとって赤い薔薇だった彼女の成長した穏やかな姿を見つめるうちに、チェンパオの目には涙が浮かび上がった。現在の自分の姿と彼女の幸せな姿を比べると、なんとも言えないような嫉妬心が彼の心の中に湧いてきたのであろう。

翌日から、チェンパオは心を入れ替え、再び生まれ変わる決意をして、この映画は終わる<sup>(21)</sup>。

異文化を体験したジョアン・チェンは久々に中国語を使い、この作品に主演したのである。彼女が扮したチャオルイはイギリスの大学で教育を受けた当時の中国では新しい女性であったので、中国での伝統的な女性の美徳「三従四徳」は彼女にとって、意味のないものであったのである。

そして、ジョアンは自分自身の自由だけを主張するのではなく、特に、自らの精神的な自由も大切にしている。自分に対し忠実に、自らの運命をコントロールする自由主義者を演じている。彼女はチェンパオと付き合ううちに、「愛」の真実が初めて分かってきたのであろう。

『赤い薔薇・白い薔薇』は単純な自文化と再会の作品ではない。異文化と自文化との統合した映画でもあったのであろう。「西洋人から見れば彼女は東洋人らしく見える。東洋人から見れば彼女は西洋人風を感じる。」と台湾の映画評論家舒坦はジョアンの魅力についてこう評価した<sup>(22)</sup>。

ジョアン・チェンは、『赤い薔薇・白い薔薇』で、第31回台湾アカデミー賞である「金馬賞」の主演女優賞を獲得したのである。

## 5. 自文化への回帰—初監督作品『シュウシュウの季節』

女優として成功したジョアンは、1998年に、映画監督にチャレンジした。初監督作品となった『シュウシュウの季節』は、第48回ベルリン国際映画祭に正式出品され、これは、第35回台湾アカデミー賞「金馬賞」で史上初の11部門にノミネートされ、そのうち監督賞



自文化回帰の異文化体験—映画における中国系アメリカ人女優ジョアン・チェン—  
や作品賞を含め、7部門を受賞した。ジョアン・チェンは、女優から女性監督への見事な  
転身を遂げたのである<sup>(23)</sup>。

この映画で、彼女は俳優としてではなく、映画監督として、自国文化というものを表現  
することができたのである。映画を製作することにより、異文化から自文化へ回帰したと  
も考えられる。

『シュウシュウの季節』(原題:天浴)<sup>(24)</sup>は、同じ上海出身で、アメリカに移住した女性  
作家嚴歌苓(ヤン・ゲリン)の原作小説に基づいてジョアン・チェンは自ら企画し、製作  
から脚色までこなした処女作である。

『シュウシュウの季節』は、中国文化大革命末期の1975年、四川省にある美しい街成都から、  
チベット高原の辺境に下放となった十五才の少女の悲劇を描いた作品である。この映  
画は、下放の現場を舞台にしており、「下放」政策がもたらした極限状態と、そこに置き去  
りにされた男と女の数奇なラブ・ストーリーである。

主人公シュウシュウは、都会育ちの仕立屋の純真な可愛い娘である。彼女は半年の期限  
つきで、チベット族の中年男性ラオジンに放牧の指導をうけることになった。シュウシュ  
ウは、ボロボロの軍隊用テントで、昔の喧嘩が元で去勢された指導者ラオジンと二人で暮  
らすことになった。彼女は、誠実な彼の人柄に触れ、次第に信頼を寄せていく。一人孤独  
な生活を続けてきたラオジンにとっても、シュウシュウは高原に咲いた一輪の花であり、  
彼の乾いた心を癒すオアシスでもあった。シュウシュウは、生活は厳しいものの、無口で  
愛情の深いラオジンに見守られ、また、美しい草原に囲まれ、暮らしていった。ラオジン  
は入浴ができないと文句を言う彼女のために、地面を掘って、池を作る。青空の下での水  
浴び(天浴)が、この映画のタイトルになっている。

しかしながら、そんな穏やかな生活は長く続かなかったのである。半年後、迎えに来る  
はずの本部からの軍役人は来なかった。実は、文化大革命終結で混乱していた本部は、シュ  
ウシュウのことを忘れてしまっていたのである。家に帰りたい一心の彼女は、放牧地を巡  
回するセールスマンの「コネをつけてあげる」の一言で、地獄の蓋を開けてしまった。帰  
郷の許可証を手に入れようと焦る彼女の弱味につけ込んで、自称“権力者”たちは次々と  
彼女をレイプし、凌辱した。

シュウシュウは、革命の理想を信じたのと同じように、ただ一途に家に帰りたいと願い、  
その実現のためには、自分の“性”が何よりの武器になることを知り、それを行使したの  
である。その結果、望まない妊娠、中絶、そして、周囲から侮べつの視線を浴びられたシュ  
ウシュウは心身ともにボロボロになってしまった。

最後に、彼女に対する愛情を抑えていたラオジンは、彼女の望み通り、自分の銃で、シュウシュウを撃ち、彼女をこの地獄の底から救い出した。ラオジンはシュウシュウの遺体を池の中に置いた後、ジッと彼女を見わめていた。シュウシュウのために作った天浴場がまさか彼女の墓になるとは夢にも思わなかったことであろう。そして、彼は、同じ銃を自分の胸に当て、自らも池に沈んでいった。間もなく雪が彼らを完全に埋め尽した<sup>(25)</sup>。

ラオジンのシュウシュウへの愛情と人間としての感情は紛れもなく純粹で、彼が彼女に下した最後の決断は、彼女の人間としての誇りと尊厳を守るためのものであった。

ジョアン・チェンは、過酷な運命にさらされ、文化大革命がなければ出会うこともなかった男女の極限の愛を、見事に描いている。

「極限に置かれた人間は、けだものになるか、やさしくなるか。その振る舞いと本性を描きたかった」とジョアン本人が解釈している<sup>(26)</sup>。この映画製作を経て、ジョアンは「自己を犠牲にした愛」という、その時代の「極限の愛」を表現したかったのである。

中国では「落ちた葉は樹の根本に戻る」という諺がある。これは、彼女がこの処女作により、異文化体験から自国文化環境に回帰したという事実を描写している。

なお、『シュウシュウの季節』は昨年(1999年)9月にウイグル愛知一愛知県女性総合センター主催の「国際女性映画祭」に上映され、11月には東京銀座の映画館(シネスイッチ銀座)でも上映された。しかし、残念なことは、中国の文化に基づいて作られたこの作品『シュウシュウの季節』は、当の中国国内では上映禁止されたということである。

## 6. おわりに

これまで述べたことから、ジョアン・チェンは映画を通じ、自文化から出発し、異文化へ飛び込み、それを体験し、そして、自文化と再会し、最後に、異文化から自文化へ回帰するという、一つの文化循環を完了させたということがいえる。

しかし、ジョアン・チェンの活躍はこれで終結しなかった。その後、再びハリウッドに戻って、異質文化で女優として活動していく。近年、“What,sCookin”というインディペンデント映画に出演し、また、次回監督作は、リチャード・ギア主演の“Autumn in N. Y.”となる予定があるという。その後、『シュウシュウの季節』と同じくヤン・ゲリン原作、共同脚本作品『扶桑』の監督を務める企画もある<sup>(27)</sup>。

これらを総合的に考察してみると、彼女の移動パターンは以下の四つがあると考えられる。

- 1) 地理的移動：中国→アメリカ→中国→アメリカ→中国
- 2) 言語的移動：中国語→英語→中国語→英語→中国語
- 3) 文化的移動：自文化→異文化→自文化と再会→自文化へ回帰→異文化→自文化
- 4) 職業的移動：女優→監督・製作→女優→監督→女優

これらを要約してみると、以下のようにまとめることができる。

まず、この四つの移動から、ジョアン・チェンは社会的アイデンティティと文化的アイデンティティを確立することができた<sup>(28)</sup>。

彼女は十年前に中国籍をやめ、米国籍を取得している。物理的居場所に異文化の外国を選んだ理由は、「アメリカのパスポートの方が海外で活動しやすいから」である<sup>(29)</sup>。ここで国籍という社会的アイデンティティを確立した。また、女優から女性監督への変身により社会的に認められ、職業上としての社会的アイデンティティを形成したのである。一方、ジョアンは、アメリカに二十年近く在住していたが、自分が生まれ育った母国文化に帰属することを決意した。「国籍はアメリカだけど、自分の意識は中国人そのものです。」と本人は発言している<sup>(30)</sup>。人間の心は、こちらの環境からあちらの環境へと器用に変われるものではないだろう。体は移動していても、心理的居場所は永遠に自国文化環境という原点に置かれている。

第2に、ジョアンのこの異文化移動パターンを観察すると、「二重併存」という現象が浮かび上がってくる。地理的な移行により、現在の身分上では彼女の存在は二つの意味を持っている。純粋な中国人ではなく、チャイニーズ・アメリカン、いわゆる中国系アメリカ人となった。また、映画を通し異文化と出会い、これにより自文化を再発見し、二つの文化を持つようなバイカルチャラルを身につけることが実証できた。次に、言語上は、外国語としての英語を母語の中国語のように自由に使用することによって、完全なバイリンガルになった<sup>(31)</sup>。また職業上でも、女優という受動的な役から女性監督という主動的な地位に成長していったことがわかる。

第3に、中国人／アメリカ人、自文化／異文化、中国語／英語、女優／女性監督という「二重併存」現象によって、ジョアン・チェンの持つ文化は周縁化されたものから多元性のあるものに変容したことが認識できよう。

第4に、この四つの意味の移動を分析してみると、彼女の異文化移動は単なる平面的な移動ではなく、もっと立体感に溢れた「螺旋的な上昇移動」ではないだろうか。筆者が定義してみたこの「螺旋的な上昇移動」により、社会的資源が豊富になり、文化的表現がより深まり、洗練さを増し、言語や文化の壁を乗り越え、さらに飛躍していくのである。

最後に、自文化を踏み出し、異文化に接触し、それにより自文化を再認識し、また自文化へ回帰というジョアン・チェンの成長プロセスを回顧してみると、彼女は本格的な国際人として養成されたといえるのではないか。これからも、太平洋の東と西、中国とアメリカ、そして、自文化と異文化環境の間で、女優として、女性映画監督として、そして、国際派としてジョアン・チェンは益々の活躍を続けるであろう。

ジョアン・チェン文化移行・映画作品年表

文化移行	出演・監督映画作品	年代	監督・共演者・受賞等
自文化	『青春』(主演)	1977	16才, 女優デビュー, 謝晋監督
		1978	上海外国語学院英語学部入学
	『戦場の花』(主演)	1979	19才, 張錚監督(女優出身)
		1980	中国百花賞主演女優賞受賞 ユーゴスラビア「自由闘争映画祭」 主演女優賞受賞
	『蘇醒』(主演)	1981	トン・ウェンチー監督
異文化へ		1981	渡米, ニューヨーク州立大学, カリフォルニア州立大学 Northridge 校で演技と映画製作を学ぶ
異文化接触・異文化体験	“Dim Sum: A Little Bit of Heart” 『タイ・パン』(主演)	1984 1986	ウェイン・ワン監督 ジェイムズ・クラベル原作 ダリル・デューク監督
	『ラスト・エンペラー』	1987	26才, ベルトルッチ監督 アカデミー賞で9部門受賞 (この作品で一躍アジアを代表 する国際的女優の地位を確立)
	『サルート・オブ・ザ・ジャガー』	1989	ルトガー・ハウアー共演
	『ウェドロック』	1991	
	『抱きしめたいから』(主演) 『誘僧』(主演) 『天と地』	1991 1993 1993	スティーブン・ウォレス監督 クララ・ロー監督(香港映画) オリバー・ストーン監督 (ベトナム戦争の第3部作)
自文化と再会	『赤い薔薇・白い薔薇』(主演)	1994	33才, スタンリー・クワン監督 張愛玲原作・第31回台湾 金馬獎主演女優賞受賞
異文化体験を継続	『沈黙の要塞』(主演)	1994	スティーブン・セガール監督
	『ワイルドサイド』(主演)	1995	アン・ヘシュ&ウォーケン共演
	『ハンテッド』	1995	J.F. ロートン監督(日本ロケ) ジョン・ローン共演
	『ジャッジ・ドレッド』(主演)	1995	シルヴェスター・スタローン共演
	『アウターゴールド』	1996	

自文化 へ回帰	『シュウシュウの季節』（初監督）	1998	37才，巖歌苓原作 第48回ベルリン国際映画祭出品 第35回台湾金馬獎で7部門受賞 （監督賞や作品賞等）
再び異 文化へ	“What's Cookin”（出演） “Autumn in N.Y.”（監督）	1999 2000	インディペンデント映画 リチャード・ギア主演
再び自 文化へ	『扶桑』（監督） 『万人の情婦』（主演）	予定 予定	巖歌苓原作 レオン・カーフェイ共演

\* 当年表は参考文献により筆者作成。

### 【注】

- (1) 婁岩ナオミ著『壁が，異文化対応の極意』筑摩書房，1991年17頁より「未知」と「既知」という概念を引用。
- (2) 鈴木一代著『異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の人間—』プレーン出版，1997年，21頁参考。
- (3) 『'97中華電影完全データブック』キネマ旬報社，1997年11月11日号，20頁より参照。
- (4) 張錚監督『戦場の花』，北京映画製作所出品，1979年。
- (5) パンフレット『シュウシュウの季節』日本ビクター，1999年11月3日，8頁による。
- (6) 前掲文献。
- (7) 鈴木一代著『異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の人間—』プレーン出版，1997年，45頁より引用。
- (8) 同上。46頁より作成。
- (9) 箕浦著「親と子の異文化体験」サイコロジー，11月号，60-65頁より引用。
- (10) 石井敏也編『異文化コミュニケーションキーワード』，有斐閣，1997年，7頁より引用。
- (11) 共同通信社本部編集部編『アカデミー賞』，共同通信社，1999年，228頁を参考。
- (12) ベルナルド・ベルトルッチ監督『ラスト・エンペラー』，Yanco Films Limited and Tao Film SRL 出品，1987年，ビデオを参考。
- (13) パンフレット『シュウシュウの季節』日本ビクター，1999年11月3日，8頁を参照。
- (14) スティーブン・ウォレス監督『抱きしめたいから』Village Roadshow 出品，映画ビデオにより要約。
- (15) オリバー・ストーン監督『天と地』，Waner Bros. Productions Lid. 出品，1993年，映画ビデオより要約。
- (16) スティーブン・セガール監督『沈黙の要塞』Warner Entertainment Company 出品，1994年，映画ビデオより要約。
- (17) J. F. ロートン監督『ハンテッド』Davis Entertainment Company 出品，1995年，映画ビデオより要約。
- (18) 星野命著『クロスカルチャ思考への招待—異文化体験の心』読売新聞社，1992年，20頁より引用。
- (19) 前掲文献。
- (20) 張愛玲著垂水千恵訳「赤い薔薇・白い薔薇」，今福龍太他編『ノスタルジア』岩波書店，1996年，182-238頁参照。

- (21) スタンリー・クワン監督『赤い薔薇・白い薔薇』、金龍映画有限会社出品、1994年、映画ビデオより要約。
- (22) 舒坦著『飛躍的光譜』(台湾)業強出版社、1995年、126頁より引用。
- (23) パンフレット『シュウシュウの季節』日本ビクター、1999年11月3日、8頁参照。
- (24) 巖歌苓著阿部敦子訳『シュウシュウの季節』(文庫)角川書店、1999年。
- (25) ジョアン・チェン監督『シュウシュウの季節』ウィパリング・ステップス出品、1998年、映画ビデオより要約。
- (26) 宮川政明著「極限に置かれた人間描く」朝日新聞、1999年8月28日夕刊より引用。
- (27) 筆者が作成した「ジョアン・チェン文化移行・映画作品年表」を参照。
- (28) 鈴木一代著『異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の人間—』ブレーン出版、1997年、89-95頁を参考。
- (29) 宮川政明著「極限に置かれた人間描く」朝日新聞、1999年8月28日夕刊より引用。
- (30) 山本雅代著『バイリンガル—その実像と問題点—』大修館書店、1991年、第1章を参照。